

「女性的なるもの」の位相：母権制と反ユダヤ主義 に関する試論

福元, 圭太
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5501>

出版情報：言語文化論究. 17, pp. 45-52, 2003-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：



「女性的なるもの」の位相

—— 母権制と反ユダヤ主義に関する試論 ——

福元圭太

1. はじめに

ハンス・ユリウス・シェプスとヨアヒム・シュレールが共同編集した『反ユダヤ主義』という論文集に掲載されているエヴァ-マリア・ツイーゲの論文、「女神の殺害者たち」¹⁾は、ヴァイマル共和国時代のバッハオーフェン受容が反ユダヤ主義とどのように接続しているかというテーマをめぐって、さまざまな言説の錯綜した関係を解きほぐし、たいへん示唆に富む。本論では彼女の論旨を追いながら、男性ジェンダーと女性ジェンダーの振り分けという視点から、母権制と反ユダヤ主義の問題を整理してみたい。

2. 二つの理論

ツイーゲは20世紀の初頭に二つの「救済」の理論が成立したという²⁾。この二つの理論の共通する目標は「いかにユダヤ的なるものから救済されるか」というものである。その際これら二つの理論に共通して鍵となった概念は「女性的なるもの」であった。第一の理論は、「女性的なものを克服することによってのみ、我々はユダヤ的なるものから救済される」と言い、第二の理論は、「女性的なるものを通じてのみ、我々はユダヤ的なるものから救済される」と主張した。

「ユダヤ人は女性的である」と喧伝し、すなわちユダヤ人に一方的に女性ジェンダーを割り振り、その克服こそがユダヤ的なるものからの救済であるという、第一の理論を代表するのが、オットー・ヴァイニンガーである。大ベストセラーとなったヴァイニンガーの『性と性格』（1903年）における女性蔑視は生半可のものではなく、「女性は受け身で、攻撃されたいという欲求を持つ」「女性は性的で、夫と子供との関係に埋没しきっている」「女性は思考と感情を区別しない」「男性は意識的に生き、女性は無意識的に生きる」「女性に天才はいない」「女性には記憶力がない」「女性は嘘つきである」

「女性は自我を持たない、魂を持たない、精神を持たない、人格も、自主独立性も、性格も意志も持たない」³⁾

「女性は母か娼婦である」「女性は無であり存在しない。存在の形式が与えられるのは男性の性的客体としてのみである」「女性は罪をおかすことはできない、彼女自身が罪なの

である」「女性は性欲それ自体であり、男性を墮落させる」云々、ほとんど女性へのオブセッションに取り憑かれた罵詈雑言としか思えないが、このような女性的性格がそのままユダヤ的性格として規定されるのである。ヴァイニングの『性と性格』は20年代においては特に民族主義・人種主義的な右側の陣営に好んで読まれるところとなり、ヴァイマル共和国の民主主義が「女性化と退化」の産物であるといった主張の「精神的な発案者が誰であったかという注釈がもはや必要でないほど」⁴⁾その影響力は大きかった。

他方第二の理論を、すなわち「女性的なるものを通じてのみ、我々はユダヤ的なものから救済される」と主張したのはミュンヘンに参集していたルートヴィヒ・クラゲスやアルフレート・シューラーを中心とする「宇宙論サークル」の面々である。バッハオーフェンの『母権制』に心酔していたクラゲスらは、ユダヤ的なものの侵入が太母 (Magna Mater) の死を招いたと言う。ユダヤ的なもの、つまり一神教と旧約聖書の世界の預言者たちが、聖書時代以前の母権社会と女神崇拜の根絶と父権制の導入に対して責任がある、と叱責されるのである。「女神の殺害者たち」とはユダヤ人のことであり、彼らこそ一神教的父権制、極端な男性社会を世界史にもたらし、母権的平和を終わらせ、戦争や暴力や破壊をもたらした元凶であるとされるのである。

3. 『母権論』のアンヴィバレンツ

法の歴史と国家理論を専門としていたヨーハン・ヤーコプ・バッハオーフェンが主著『母権論』を上梓したのは1861年のことであった。バッハオーフェンがこの書で進化論的歴史モデルを導入し、歴史を三つの段階に分けたことはよく知られている。

まず最初に「混沌とした乱婚制」(regelloser Häterismus)の時代があり、そこでは父親が誰であるかに関係なく「野蛮で、秩序のない沼地の交媾」(wilde, ungeriegelte Sumpfbegattung)が行われていた。第二段階として、婚姻に基づく母権制 (Gynaikokratie)の時代がくる。この時代は平和的な「自然法」が存在した、ユートピアの相貌が垣間見える時代である。最後に現在まで続く、絶え間ない闘争の時代、父権制の時代がそれにとって代わるのである。

母権制が母体という物質を中心としていたとすれば、父権制は、子孫を産む行為の間接性からみても、もはや物質性を離れ、アポロ的な理性と精神の原理に基づいていると言わねばならない。混沌から物質性、さらに理性という道筋を「進歩」ととらえる歴史観(これ自体父権的であるわけだが)からすれば、父権制をもって歴史の最終的で最高の段階に達したということに、とりあえずはなるだろう。

しかしバッハオーフェンの記述が必ずしも父権制の到来を双手をあげて歓迎しているようには読めないことを、例えばエルンスト・ブロッホのような明敏な読者は見落としていない。ブロッホはバッハオーフェン自身、歴史の第二段階である母権制に魅了されていたにもかかわらず、父権制によるその克服をもって歴史が完成したととらえたのは、アンビバレントであると指摘する。論文「母権 (アンチゴーネー) と自然法の関係について」でブロッホはバッハオーフェンの過去へのまなざし、かつてあったユートピアへのまなざし

は「まったく冷静であろうとはしていない」⁵⁾と言う。ブロッホによるとバッハオーフェンの『母権論』は「翻訳不可能なほどにドイツ・ロマン派の産物」⁶⁾であり、著書の献辞は母親あてになっているが⁷⁾、バッハオーフェンはこの主著を「母の思い出に、つまり徹頭徹尾個人的なイマゴに捧げているのだ」⁸⁾とまで極論する。ブロッホはバッハオーフェンのアンビバレンツの原因を彼のキリスト教徒、ルター派のキリスト教徒である点に帰する。

バッハオーフェンはルター派のキリスト教徒として最終的にはアンビヴァレントな態度をとらざるをえない。というのも彼は母との結びつきによって母権制に引かれながら、市民的な理性によって、プロテスタントのキリスト教によって、父権制に引かれるからである。バッハオーフェンは母権支配を「歴史のポエジー」と賛美したかと思うと返す刀でアポロンを称揚したり、ローマ法を高く評価したり、あるいはキリスト教を「その父性原理の高度な純粋性において」、父の宗教として絶対化したりする。すなわちバッハオーフェンは、ある時はパーテル・エクスタティクス(感動せる神父)となって異教的な大地の母の、大地のマテリアの秘教に膝を屈し、またある時はパーテル・セラフィクス(天使の如き神父)となってアポロ的・キリスト教的精神が、母性的なガイア・マテリアや胎内と墓所の循環などを超越することに帰依するのである。バッハオーフェンの心は母権支配の側にあり、彼の頭は父権支配の側にある。⁹⁾

バッハオーフェンへの満腔の尊敬にもかかわらず、ブロッホが見事に言い当てた「心は母権支配の側にあり、彼の頭は父権支配の側にある」という彼のアンビバレンツには辟易していたクラージェスも、1922年にこう書いている。

バッハオーフェンはまさに「善悪の彼岸」に、いかなる法の恣意にも惑わされない「自然法」が、人間と世界、また人間同士の最奥のつながりを保護する「自然法」があることを微に入り細に入り証明したにもかかわらず、平和を乱す反対意志、すなわち父権制を、道徳の「より高い段階」への移行として承認することで誤謬をばらまいたのだ。¹⁰⁾

クラージェスのプレ・ファシズム的なユダヤ人嫌悪は上記のような歴史観、つまり母権制の破壊者としてのユダヤという歴史観と無関係ではない。クラージェスの主著である『魂の抗争者としての精神』(*Der Geist als Widersacher der Seele*; 1929-32)においては、ユダヤ的なものが(古典古代ギリシアのヘラクレイズムと並んで)「精神」としての男性原理として想定され、それが「魂」という女性原理の破壊者であることが告発されるのである。バッハオーフェンが母権制を「歴史のポエジー」というユートピアとして想定していたにもかかわらず、父権制への移行をより高い段階への進歩であるとしたのとは正反対に、クラージェスは男性原理である精神(Geist)を敵視し、女性原理である魂(Seele)を擁護するユートピア、歴史の流れとは逆の「後ろ向きの」ユートピアを志向したと言えるのだ。

4. ボイムラーとトーマス・マン

クラゲスと並んで1920年代におけるバッハオーフェン・ルネッサンスを担ったのは、哲学者アルフレート・ボイムラーであった。ボイムラーは、1926年に刊行されたマンフレート・シュレーター (Manfred Schröter) による1巻本のバッハオーフェン・アンソロジー『東洋と西洋の神話—古代世界の形而上学』¹¹⁾巻頭に、300ページになんなんとする長大な論文を「序論」として付しているのだが、この序論に対するトーマス・マンの批判はよく引き合いに出されるものである。

トーマス・マンは1926年の『バリ訪問記』においてボイムラーのバッハオーフェン観を「過去の母権的な夜の理想」への反動、蒙昧な非開化主義、反啓蒙主義と非難し、ハイデルベルクのロマン主義、つまりイエーナの前期ロマン主義ではなく、国粹主義化した後期ロマン主義、ハイデルベルクとはいえ、ブレンターノやアルニムではなく、ヨーゼフ・ゲレスのロマン主義であるという。

今日のドイツ人に、この夜への熱狂を、大地、民族、自然、過去、死のヨーゼフ・ゲレス流の観念連合を、思い切って言えば革命的な反啓蒙主義を吹き込むことは、よい行為、生命に対して友好的で教育的な行為と言えるだろうか。¹²⁾

しかしマンのこの批判が必ずしも的を射たものでなかったことは、すでに何人もの研究者の指摘するところである。例えばマンフレート・ディールクスは、マンはボイムラーのバッハオーフェン観を明らかに誤解していると言う。ボイムラーは「夜への熱狂、大地、民族、自然、過去、死」といった母性的な原理に愛着を感じているとはいえ、それがいずれは理性的な父性原理によって克服されることを認めているのに、マンは不当にもそのことを「見逃して」いた、と言うのである¹³⁾。さらにディールクスは、マンが『ヨゼフとその兄弟』執筆に当たり、批判している当のボイムラーのこの論文を大いに参照していることをも実証している。また、ヘルマン・クルツケらも、ボイムラーとマンとの確執に関係するテキストを網羅した資料集のなかで、マンにボイムラーに対する誤解があったことを、ディールクスと異口同音に指摘している¹⁴⁾。

ボイムラーはそれでは、具体的にテキストのどこで父性原理の勝利を確信しているのだろうか。当時のドイツが母権的な時代の相を帯びていることをボイムラーは嘆いて、次のように書いている。

晩期にさしかかった墮落していく文明 (Zivilisation) の中では、いまやイシスとアスタルテの神殿が、かのアジアの母神たちの神殿が再興されようとしている。彼女たちの帰依者は性的オルギアと放縱のなかで、官能の耽溺のさなかで絶望的な敗北感をもって、この女神たちに仕えるのである。¹⁵⁾

このような無秩序と性の汪洋というディオニュソス的女性原理の氾濫を最終的に根絶することはできないものの、それに再三にわたって勝利しなければならないものがアポロ的・理性的な男性原理である。ボイムラーの「序論」と言うにはあまりに長大なこの論文

は次のような文言でしめくくられている。

最終的な勝利はないであろう。しかしおそらく勝利を収める力は存在する。母はつねに新たに息子たちを産む。つねに新たに太陽は暗闇から立ち昇る。つねに新たに東洋（Orient）は西洋（Okzident）によって克服されるのだ。¹⁶⁾

「母・暗闇・東洋」という女性原理の克服者としての「息子・太陽・西洋」という男性原理の対置、そして後者をボイムラーが志向しているとすれば、ボイムラーは「夜、大地、民族、自然、過去、死」に熱狂しているというマンの読みは、たしかに公平であったとは言えない。

しかしマンがボイムラーを蒙昧な非開化主義、反啓蒙主義と非難したことがやはり正しかったことを、後の歴史が証明してしまう。なるほど26年当時ボイムラーはドレスデンで哲学を講じており、右派やナチス党とは特別に近い関係にあるわけではなかった。しかしボイムラーは1933年、ナチスの権力掌握とともにベルリンの政治教育学の正教授として招聘され、ローゼンベルクと並ぶナチスのイデオログとなったのである。

またボイムラーとナチズムとの親近性は、女性原理と男性原理というジェンダーを「人種」のラベリングに導入することにある。すなわちボイムラーは、オットー・ヴァイニング同様にユダヤ人を女性的、アーリア人を男性的とし、優秀な後者が退廃的な前者を克服しなければならないというイデオロギーを蔓延させたのであった。

クラージェスの反ユダヤ主義は、それ自体としては後のナチズムの主張と合致しているとはいえ、男性原理と女性原理という問題に関しては、ナチズムにおけるジェンダー配置の構図とちょうど対称をなしている。すなわちクラージェスは「父権的なユダヤ性」に反発し、ユートピア的母権性に憧れたのだ。

一方ボイムラーはクラージェスとは反対に、父権的北方アーリア人を「母権的なユダヤ性」に対置し、前者による後者の克服というナチズムのイデオロギーを、すでに1926年において先取りしていたことになる。

5. 大母への恐怖と憧憬

しかしながらエヴァ-マリア・ツイーゲが言うように、ユダヤ人を「性的・退廃的で女性的な父権制の病巣」と見る立場とそれを「母権制の破壊者にして父権制の確立者」と見る立場との対立、「女性的なものを克服することによってのみ、我々はユダヤ的なものから救済される」か「女性的なるものを通じてのみ、我々はユダヤ的なものから救済される」という対立、すなわちボイムラーのそしてまたローゼンベルクらのナチズム的思想と、クラージェスら「宇宙論サークル」の思想の対立は、心理学的に見れば「その見かけほどは反対の命題ではない」¹⁷⁾ではないか。バッハオーフェン自身にも母権と父権の間の選択にアンビバレンツがあったように「大母への不安とその憧れに満ちた召喚は相互補完的な役割を演じている」¹⁸⁾と言えないであろうか。この両方の見方が同時代において並列していたことは明確な二元論的対立ではなく、母なるものへの恐れと憧れという同時的でアン

ビバレントな現象の表れであるというツィーゲの発想は、決して奇を衒ったものではない。

いずれにせよ注目すべきはボイムラーもクラージェスもある一点では完全に一致していたことである。それはユダヤ人嫌悪という契機である。もっとも、繰り返せば、両者の間にはユダヤ人を「母たち」と見るか「母たちの殺害者」と見るかの違いはあったのだが。ボイムラーはヴァイニングアーに倣ってユダヤ人に「女性原理そのもの」を投影し、それを内心では恐れ、嫌悪し、その侵入を防御しようとした。一方クラージェスはユダヤ人に「女性原理の殺害者」を投影し、失われた女性原理を再び呪文で呼び出そうとしたのである。

ナチズムがドイツを席卷した実際の歴史では、ボイムラーらのイデオロギーが優勢となる。「ユダヤ人は女性的」というレッテルが通用するのである。ナチズムのイデオロギーに社会ダーヴィニズムが顕著であったことは、「劣等人種」などというナチス的言語を見るだけでも明らかなのだが、父権制から母権制への移行、いやナチスにとっての「逆行」は、彼らには想像するだに恐ろしいものとなった。それは父たちにとっては進化の逆転、すなわち「退化」と同義にならざるを得ない。父たちにとって女性原理の噴出は、混沌とした自然への転落、進化論上の逆行である。母への恐怖が、デモクラシー、愛、平和、官能性などを禁止するナチス・イデオロギーの深部に宿っていたのである。

注

- 1) Ziege, Eva-Maria: „Die » Mörder der Göttinnen «“. In: *Antisemitismus*. Julius H. Schoeps und Joachim Schlör (Hrsg.), Piper, München, 1996, S.180-195.
- 2) Ebd., S.180.
- 3) Weininger, Otto: *Geschlecht und Charakter*. Mattes & Seitz Verlag, München, 1980. Nachdruck der 1. Auflage, Wien, Mai 1903, S. 269.
- 4) Ziege, Eva-Maria: a. a. O., S. 180.
- 5) Bloch, Ernst: „Über Beziehungen des Mutterrechts (Antigone) zum Naturrecht“. In: *Sinn und Form*. 6. Jg., H. 2, Rütten & Loening, Berlin, 1954, S. 240.
- 6) Ebd., S. 240.
- 7) 献辞は以下のとおり。Dem Andenken meiner Mutter Frau Valeris Bachofen geb. Merian.
「わが母ヴァレリア・バッハオーフェン夫人、旧姓メリアンの思い出のために」
- 8) Bloch, Ernst: a. a. O., S. 240.
- 9) Ebd., S. 243.
- 10) Klages, Ludwig: *Vom kosmogonischen Eros*. Bouvier, Bonn, 1981 (8. Aufl.), S. 227 f. (初版は1922年、ミュンヘンのゲオルク・ミュラー社刊)
- 11) *Der Mythos von Orient und Occident. Eine Metaphysik der alten Welt. Aus den Werken von J. J. Bachofen*. Hersg. von Manfred Schröter, München, 1926. Einleitung von Alfred Baeumler: *Bachofen / der Mythologie der Romantik*.
- 12) Mann, Thomas: *Gesammelte Werke in 13 Bänden*. Fischer, Frankfurt a. M., 1990. Bd.11, S. 48.
- 13) Dierks, Manfred: *Studien zu Mythos und Psychologie bei Thomas Mann*. Franke, Bern und München. 1972, S. 172 und 174 f. なおディールクスは、マンの非難は「ディオニュソス

- 信者クラーゲスにならば当てはまっていたかもしれない」と付け加えている (S. 172)。
- 14) Baeumler, Marianne / Brunträger, Hubert / Kurzke, Hermann: *Thomas Mann und Alfred Baeumler. Eine Dokumentation*. Königshausen & Neumann, Würzburg, 1989, S. 8.
- 15) Baeumler, Alfred: a. a. O., S. CCXCI.
- 16) Ebd., S. CCXCIV.
- 17) Ziege, Eva-Maria: a. a. O., S. 186.
- 18) Ebd., S. 186.

参考文献

- Bachofen, Johann Jakob:** *Der Mythos von Orient und Occident. Eine Metaphysik der alten Welt. Aus den Werken von J. J. Bachofen*. Mit einer Einleitung von Alfred Baeumler. Herausgegeben von Manfred Schröter. C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München, MCMXXVI (1926).
- Bachofen, Johann Jakob:** *Das Mutterrecht. Eine Untersuchung über die Gynaiokratie der alten Welt nach ihrer religiösen und rechtlichen Natur*. Eine Auswahl. Herausgegeben von Hans-Jürgen Heinrichs. Suhrkamp, Frankfurt a. M., 1993.
- Baeumler, Marianne / Brunträger, Hubert / Kurzke, Hermann:** *Thomas Mann und Alfred Baeumler. Eine Dokumentation*. Königshausen & Neumann, Würzburg, 1989.
- Bloch, Ernst:** „Über Beziehung des Mutterrechts (Antigone) zum Naturrecht“. In: *Sinn und Form*. 6. Jg., H. 2, Rütten & Loening, Berlin, 1954, S. 237-261.
- Dierks, Manfred:** *Studien zu Mythos und Psychologie bei Thomas Mann*. Franke, Bern und München. 1972.
- Heftrich, Eckhard:** „Johann Jakob Bachofen und seine Bedeutung für die Literatur“. In: *Merkur*. 32. Jahrgang, Heft 8, August, 1978. S. 685-698.
- Heinrichs, Hans-Jürgen (Hersg.):** *Materialien zu Bachofens „Das Mutterrecht“*. Suhrkamp, Frankfurt a. M., 1975.
- Klages, Ludwig:** *Vom kosmogonischen Eros*. Bouvier, Bonn, 1981 (8. Aufl.).
- Mann, Thomas:** *Gesammelte Werke in 13 Bänden*. Fischer, Frankfurt a. M., 1990. Bd. 11.
- Weininger, Otto:** *Geschlecht und Charakter*. Mattes & Seitz Verlag, München, 1980. Nachdruck der 1. Auflage, Wien, Mai 1903.
- Ziege, Eva-Maria:** „Die » Mörder der Göttinnen «“. In: *Antisemitismus*. Julius H. Schoeps und Joachim Schlör (Hrsg.), Piper, München, 1996, S. 180-195.

バッハオーフェン：『母権論1』，岡道男，河上倫逸監訳，みすず書房，1991。

クラーゲス：『宇宙生成的エロース』，田島正行訳，うぶすな書院，2000。

白井隆一郎（編）：『バッハオーフェン論集成』，世界書院，1992。

奥田敏広：「母権論とロマン主義，あるいは歴史と神話－ポイムラーのバッハオーフェン受容をめぐって」，「ドイツ文学研究」報告第45号，京都大学総合人間学部ドイツ語部会，2000年，1-30頁。

新町貢司：「神話の中の『回帰』と『発展』－マンとポイムラーの神話観について」，RHO-

DUS, Zeitschrift für Germanistik, Nr. 18, 筑波大学, 2002年, 15-24頁。
田島正行：「エリーニュスの復讐 — クラーゲス哲学における反ユダヤ主義の一側面 —」,
「明治大学教養論集」通巻341号, 明治大学, 2001年, 1-18頁。

Die Topologie des „Weiblichen“

— Versuch über das Mutterrecht und den Antisemitismus —

Keita FUKUMOTO

Eva-Maria Ziege stellt fest, dass am Anfang des 20. Jahrhunderts zwei neue Erlösungstheorien entstanden seien. Beide Theorien haben ein gemeinsames Ziel: die Erlösung vom Jüdischen. Beide kennzeichnet auch ein gemeinsamer Bezugspunkt: das Weibliche.

Die eine Theorie erstrebt die Erlösung vom Jüdischen *durch die Überwindung des Weiblichen*, die andere die Erlösung vom Jüdischen *in dessen Überwindung durch das Weibliche*.

Bezug genommen wird auf Otto Weininger und Alfred Baeumler als Vertreter der einen Theorie, während die andere von Ludwig Klages vertreten wird. Dabei wird besonders der Einfluss der Schrift „Das Mutterrecht“ von J. J. Bachofen auf Baeumler und Klages erörtert. Eingegangen wird auch auf die Auseinandersetzung zwischen Baeumler und Thomas Mann um das Problem der Bachofen-Interpretation.